

東京税関

西濃シエンカーを認定通関業者に認定



東京税関は12日付で、西濃シエンカー(本社・東京都品川区、ヘルベルト・ヴィルヘルム社長)を認定通関業者(AEO通関業者)として認定し、18日に細田隆東京税関長から同社のヴィルヘルム

社長に認定通関業者認定書の交付を行った。今回の認定により、認定通関業者は東京税関管内では31者、全国では78者となった。

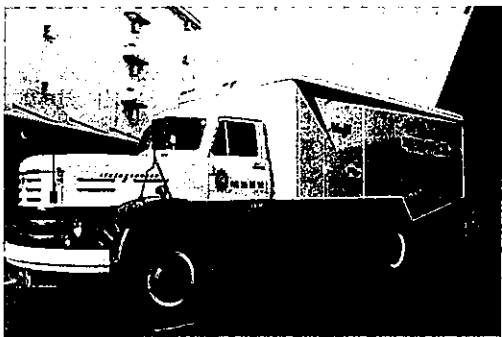
AEO(認定事業者)制度とは、貨物のセキュリティ管理と法令遵守体制が十分に整備された事業者を各国税関が承認・認定する制度で、民間事業者と税関とがパートナーシップを構築することにより、国際物流における一層のセキュリティ確保と貿易円滑化の両立を図る取り組み。世界税関機構(WCO)におけるAEOガイドライン採択以降、AEO制度は国際的に広く認識・採用され、世界主要国で導入されている。

東京税関では、「認定通関業者として認定された西濃シエンカーにおいても、我が国税関のパートナーとして、安全・安心な国際物流を確保する一翼を担っていただけることを期待している」としている。

昭和30年代の保冷車を再現した「レトロトラック」が完成

環境・安全にもこだわり、得意先のキャンペーンなどに活用

川崎陸送



川崎陸送(本社・東京都港区、樋口恵一社長)では2月21日に創業90周年を迎えるにあたって、昭和30年代当時運行していた保冷車を再現した「レトロトラック」が完成した。見た目は懐かしいボン

トを、明治製菓川崎工場(現在は賃貸ビル)から夏場でも溶けないように配送しようという目的で製作された、当時としては画期的なもので、断熱材を施した荷室内にドライアイスを入れて運べるようにした保冷車で、冷凍機はまだこの時代には搭載することはできなかったようだ。当該車両が完成した際に撮影された写真が残っていたことから、設計図を起こし、土台となる車両を調達し、型どり、成型、配色、当時は手書きだったロゴにも検討を重ね、約1年かけて



樋口社長「流通加工、通関を3本目の柱に」と
復刻車を製作したものの。車両の製作は、レプリカ車両の製作を得意とするウイング(本社・千葉市若葉区、今井一男代表)が担当

ネットトラックだが、現在の環境規制にも適合しているほか、フロントバックアイ(バンパー下)、ギアバックアイ(後ろ天井部分)、フロントバックソナー(バンパー下左右1個ずつ)を取り付けるなど安全対策にもこだわった。今後、同車両を得意先のキャンペーンなどに活用していく考えだ。
当該車両は、創業時から取り引きのあった明治製菓(現明治)の主力商品であるチョコレー

した。

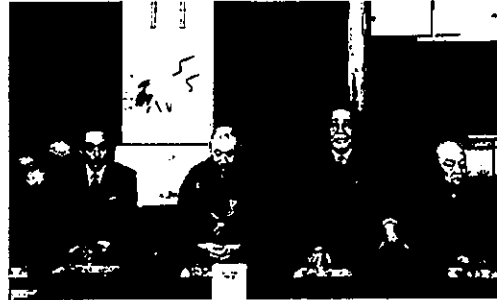
なお、車両の製作にあたっては、「車両の寸法は問わないが、外観をそっくりにする」と、「自動車NOx(窒素酸化物)法特定地域内を実際に走行できること」の2つをミッションに掲げ、いすゞ自動車の「TD50」昭和44年型をベース車に、エンジンは現行の規制に適

合したものを購入した。総費用は1600万円。

18日の「レトロトラック」完成披露会で樋口社長は、川崎陸送の歴史について、「大正13年に祖父の樋口由恵が28歳の時に、横浜陸送組を買収して開業。明治製糖の川崎港における沿岸荷役から始まった。原料糖を棧橋から下ろして

川崎陸送の創業者「ヒーさん」こと樋口由恵氏の回顧録をHPで公開

8代目桂文楽の落語の十八番「つるつる」の旦那のモデル



2月21日に創業90周年を迎えた川崎陸送(本社・東京都港区、樋口恵一社長)のホームページ(HP)で、創業者・樋口由恵氏の回顧録が公開される。由恵氏は名人と言われた落語家の8代目桂文楽のタニマチとして知られ、彼の十八番「つるつる」に出てくる旦那「ヒーさん」のモデル。8代目文楽と交流が深かった由恵氏の回顧録が90周年事業の一環で、HPのコンテンツとして登場するというので、落語好きには必見だ。

山梨県出身で県会議長を務めた樋口半六氏の次男として生まれた由恵氏は、運送業で財をなし、8代目文楽を大変慕った(ひいき)にした。由恵氏との出会いについて紹介されているのが、8代目文楽の自伝『芸談 あばらかべっそん』(ちくま文庫)。由恵氏の本業である運送業にも触れられていて、「お邸の中にレールまでしいてあるという、すばらしい御商売振り」としている。

同書では、「ヒーさん」について、文楽が座敷に来ないと芸者をひっぱりたい

り、つねったり、また、「しじゅう遊ぶ人とはいえ、なかなかの浮気(者)」で、馴染みの牛肉屋の女中との仲をとりもてと言って困らせたり、一方で、芸人や芸者たちに「おなががすいてやしないかえ」と何べんも何べんもよくきくなど「おもいやりのある」、愛すべき粹な人柄が描かれている。

「ヒーさん」の孫である樋口社長は、「幼稚園の頃、向島に連れて行ってもらった」そう。「当時は相当遊べたようだ。(遊びにお金をかけた)おかげで、当社は、中規模の会社にとどまってい

る。もしかすると、もっと大きい規模の会社になっていたかもしれない」と話す。「芸談 あばらかべっそん」では、芸者相手に大暴れする「ヒーさん」をなかなか理解できないでいる8代目文楽が、料亭の女将にこう言われる。

「何をいつてるのよ文楽さん。こういうことをして商売の苦労を忘れたいから来ているのよ」。

仕事に激務だからこそ過激なことをする「ヒーさん」の、心々に8代目文楽がしみじみと気づくシーンが印象に残る。



再現した由恵氏のコートを着て復刻車の前に立つ樋口社長

工場に持つていき、精製してできた砂糖を都内に運ぶという仕事で、当時から工場で精製する以外の部分はすべて請け負っていた」と説明。

川崎陸送では、製品 (product)、価格 (price)、プロモーション (promotion)、場所 (place) という4つの「P」のうち、「place」に関する仕事、具体的には運送、倉庫、通関、受発注、流通加工等を丸ごと請け負い、それにBCP (事業継続計画) を加えたビジネスモデルを展開しているが、そのルーツは創業時にあつたとした。

2013年度の売上高は110億円で上位4社で75%のシェアを占めており、需要の底堅い食品物流への注力、顧客との長期にわたる取り引きを経営方針に掲げている。近年、「グローバル化(いわゆる海外展開)については、当社の規模ではリスクが大きい」として、安全・安心が求められる輸入食品の流通加工(検品やラベル張り)や通関を、運送、倉庫に次ぐ「3本目の柱」とすべく力を入れており、坂戸、葛西

流通センターの流通加工施設の充実を図った。

なお、「レトロトラック」以外に、もう一つの90周年記念事業として、HPで90年の歴史を辿る。社史の作成やホームページで一挙公開という手法ではな



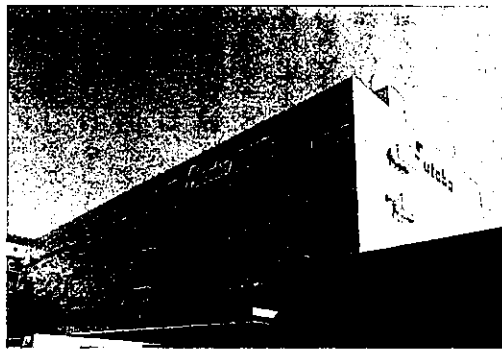
90年の歴史をHPのコンテンツで順次紹介

く、2月21日以降、月に1度、1年間かけて歴史や写真などのコンテンツを更新していく。「就職を希望する学生やパートさんなども含めて、広くあまねく当社を知っていただくため、(社史という、手に渡る人が限定されるものでなく)HPの利便性を活用していく」という。

二葉

環境に配慮した東扇島冷凍物流センター1号棟の大規模修繕工事が完了

冷蔵庫棟外壁に遮熱塗料を使用、屋上にも遮熱材一体化の防水シート



二葉(本社・東京都港区、鈴木英明社長)では、川崎市川崎区の東扇島冷凍物流センター1号棟(Ⅱ写真)で昨年9月から着手していた大規模修繕工事が完了した。同社では、「日本の食

環境に配慮した数々の設備投資などの取り組みを通じて、持続可能な社会づくりに貢献。今回大規模修繕工事をを行った東扇島冷凍物流センターでも環境に配慮した様々な取り組みを行っている。

の安心・安全を守る豊かな食生活に貢献する」というミッションとともに、装いの一部を新たにした同センターにおいても、引き続き環境に配慮した運営に取り組んでいくとしている。

具体的には、2010年度はおりしも電力の需給ギャップが生じたため、契約電力が500kWh以上の事業所に対し電気事業法第27条による電力使用制限がかかり、冷凍機のきめ細かいデマンドコントロールを行う等の節電に注力。11年度は冷蔵庫内の白熱電球1486個全てをLEDライト化した。

「環境問題が地球規模で人類共通の課題となっている中、二葉では日常の事業活動から生み出される環境負荷の低減活動はもとより、

12年度は冷蔵庫2号棟西側屋上部分を通常の防水シートから最新の遮熱材が一体化した防水シートに張り替えた。さらに、13年度は1号棟(冷蔵庫棟・荷捌棟・事務所棟)の大規模修繕に着手。冷蔵庫棟の外壁は高度の日射反射率を維持する遮熱塗料を使用し、屋上も既存防水シートの上に熱放射性能に優れた遮熱材が一体化した防水シートを新たに施工した。